

阪神・淡路大震災の犠牲者の実像

2010/1 磯辺康子

1, 震災関連死

公式発表に含まれるだけで900人以上

2, 年代別にみた犠牲者

高齢者を襲った災害

20代の多さ

3, 独居死(孤独死)

仮設住宅で233人(5年間)

復興公営住宅で568人(2000~2008年)

4, 壮年層の危険性

一人暮らし男性に目立つ孤独死

5, 地震で助かった命がなぜ守られないのか

阪神・淡路大震災

直接死5512人 関連死921人

本社再集計 自治体データ一部修正

神戸新聞社が市町提供のデータを独自集計、四月二十日付朝刊で詳報した阪神・淡路大震災の死者六千四百三十三人について、一部自治体からデータの修正などがあり、十三日までに全体を再集計した。それによると、警察の検視などを経た「直接死」は五千五百一十二人、地震後に体調を崩すなどした「関連死」は九百二十一人。消防庁公表数より直接死は九人少なく、関連死は九人多かった。

市町からは、震災死者の性別、年代、死因、死亡日のデータ提供を受けた。プライバシーの問題で、提供データに死亡者名は含まれていない。直接死と関連死の区分については、災害弔慰金支給の審査会などで震災との因果関係を認定したとする市町のデータを、関連死に分類。それ以外のデータは直接死とした。ただし明石、三木市、津名郡北淡町、大坂市、大阪府堺、吹田、箕面市は、こうしたデータの区分を示しておらず、消防庁が「災害発生後、疾病により死亡し、市町で災害による死者として認定した人」として公表している数を参考に、関連死を計上した。

死者の分析から今後の災害対策を導く趣旨で実施した震災死者の再集計では、四月二十日の掲載以降に、西宮市が前回のデータを補足、宝塚市が修正したため、ほかの自治体にも直接死、関連死の区分や死因などについて再度、確認を依頼した。兵庫県は死者の再調査を市町に求めることにしており、五月二十五日に市町の担当者を集め、調査の内容や方法を検討する初会合を開く。結果は年内をめどに公表する予定だ。

前回の集計過程で、西宮市と川西市が八十代の男性を重複して二重に県に報告していた疑いが出ているが、西宮市は川西市と調整し、川西市は計上するを決めた。一九九六年の会議資料が見つかった。西宮では計上して

死亡は各町が提供したデータを基に、上野易弘・神戸大教授(法医学)の協力で分類。再集計で全体を精査した。その結果、直接死は窒息・圧死が71%、焼死と外傷性ショックがともに7%、脳挫傷など頭・頸部損傷は4%。関連死は

死者の分析から今後の災害対策を導く趣旨で実施した震災死者の再集計では、四月二十日の掲載以降に、西宮市が前回のデータを補足、宝塚市が修正したため、ほかの自治体にも直接死、関連死の区分や死因などについて再度、確認を依頼した。兵庫県は死者の再調査を市町に求めることにしており、五月二十五日に市町の担当者を集め、調査の内容や方法を検討する初会合を開く。結果は年内をめどに公表する予定だ。

死亡日別では、直接死

は地震発生の一九九五年一月十七日に亡くなった人が94%に達したが、関連死は発生から三日間で亡くなったのは8%。一月中の累計で40%、二月の二百九十七人を含めると72%だった。災害弔慰金を受け取る遺族(配偶者や子ども、祖父母、孫)がいなかったのは、直接死で五百六十八人。市町別で神戸市が四百六十二人、西宮市が四百六十六人、芦屋市は三十一人など計七十七人に及んだ。関連死では神戸市四人、尼崎市一人、豊中市二人の計七人だった。

阪神・淡路大震災の市区町別死者数一覧(再集計)

市区町	神戸市													兵庫県										大阪府					京都府								
	東灘区	灘区	中央区	兵庫区	北区	長田区	須磨区	垂水区	西区	小計	尼崎市	西宮市	芦屋市	伊丹市	宝塚市	川西市	明石市	加古川市	三木市	高砂市	洲本市	津名郡	淡路町	北淡町	一宮町	小計	大坂市	堺市	豊中市	池田市	吹田市	箕面市	小計	大山崎町			
市区町計	6433	1468	932	242	555	13	920	400	25	9	4564	49	1126	443	22	117	4	10	2	1	1	4	5	1	39	13	6401	18	1	9	1	1	1	31	1		
性別	男	2720	618	400	124	254	6	356	167	14	7	1946	26	473	171	14	42	2	5	2	1	1	4	1	17	3	2708	8	3	3	1	1	11	1			
性別	女	3704	850	532	118	296	7	562	231	11	2	2609	23	653	272	8	75	2	5	1	1	3	1	22	10	3684	10	1	6	1	1	20	0				
性別	身元不明	9										9														9											
年齢	10歳未満	253	57	35	7	19		26	13	1	1	158		62	25		3								3	252								1			
年齢	10代	314	97	42	2	22		29	15	1	1	208		63	25	1	9								3	314									1		
年齢	20代	479	135	89	16	24		32	24	1	1	321		106	39		9								1	478									1		
年齢	30代	264	66	36	12	19		29	12		1	174		56	23		4								3	263									1		
年齢	40代	484	151	67	14	41		55	24	1	2	357		85	27	2	5								2	483										1	
年齢	50代	872	212	120	40	89		115	48	3	1	630		153	60	3	7							1	5	872										3	
年齢	60代	1219	257	196	51	106		191	72	4	1	879		211	76	5	23	1	2					1	6	1216										3	
年齢	70代	1283	240	175	46	127		244	87	9	1	933		191	83	8	29	1	2					3	6	1271										12	
年齢	80代	1080	215	147	49	89		169	87	6	2	768		171	72	3	24	3	4					1	10	1069										11	
年齢	90歳以上	176	38	25	5	14		28	16	1	1	127		28	13		4								3	174										2	
年齢	身元不明	9						2	2			9														9											
直接死	市町区分	5512	1337	856	183	442	1	763	309	2	2	3895	27	1008	394	11	83	1	8	2	1		4	5	39	10	5488	16	1	4	1	1	23	1			
直接死	<消防庁区分>	<5521>										<3896>	<31>	<1005>	<398>	<11>	<83>	<1>	<8>	<2>	<1>		<4>	<5>	<39>	<10>	<5494>	<16>	<1>	<6>	<1>	<1>	<26>	<1>			
関連死	市町区分	921	131	76	59	113	12	157	91	23	7	669	22	118	49	11	34	3	2							3	913	2								8	
関連死	<消防庁区分>	<912>										<668>	<18>	<121>	<45>	<11>	<34>	<3>	<2>							1	<907>	<2>								<5>	
死因	窒息・圧死	3922	1041	697	126	294		435	270	1	1	2865	9	800	135	3	67		4	2				5	24	3	3917	4							5		
死因	焼死	412	23	34	13	59		246	11			386	11	14												1	412										
死因	外傷性ショック	393	215	79	13	30	1	36	7			381	5	1	1	1										4	393										
死因	頭・頸部損傷	202	26	25	22	30	16	4	1			124	3	35	10	5	6									6	195	5								6	
死因	内臓損傷	54	15	6	5	10		2	5			43	7													7	54										
死因	その他・不明	529	17	15	4	19		28	12	1		96	4	147	248	2	5	1	2						1	4	517	7	1	2					12		
死因	肺炎	223	37	24	15	25	2	39	22	5		169	3	27	10	3	6	2								1	220									3	
死因	心不全	143	24	10	11	18	2	30	11	3	1	110	4	15	7	1	2	1								1	142	1								1	
死因	心筋梗塞など	95	11	9	4	8	3	12	10	2	2	61	3	16	3	9										1	93	1								2	
死因	呼吸不全など	71	7	6	5	10		10	10	2	2	52	1	12	5	1											71										
死因	脳梗塞	42	5	6	3	2		8	1	1		26	1	11	2												42										
死因	脳内出血	41	8	3	2	3	1	7	6	2		32	2	3	1	2										1	41										
死因	腎不全	39	5	3	4	3		9	3			27	1	4	5	1	1										39										
死因	肝硬変など	19	3	2		5		4	2			16		2	1												19										
死因	気管支炎	16	2	1	7			4	1			15															16										
死因	その他	232	29	12	8	39	4	34	27	6	2	161	7	28	14	5	12										230										2
死亡日	1995年1月17日	5169	1239	820	173	421	1	696	296	2	2	3650	26	942	385	11	78	1	5	2	1		3	5	37	10	5156	10								13	
死亡日	1月18日	183	51	17	5	10		42	6			131		43	3											1	179	3								4	
死亡日	1月19日	35	7	8	3	6		3	1			28		4	1												33	1								2	
死亡日	1月20日以降	125	40	11	2	5		22	6			86	1	19	5		5									1	120	2								4	
死亡日	1月17日	44	4	3	1	6		10	6			31	2	3	3	1											41	1								3	
死亡日	1月18日	17	1	1	1	1		2	5	1		12		2													17										
死亡日	1月19日	17	1	1	1	1		3				8	2	3	2	1	1										17										
死亡日	1月20-31日	289	38	21	21																																

震災の二年九カ月後、岡山県の町営住宅で、六十八歳の女性が自ら命を絶った。

一人で住んでいた西宮市の文化住宅が全壊した。避難所生活で体調が悪化。故郷の岡山に戻ることを選んだ。神戸に住む妹は「戻って来れるかもしれないから」と、住民票を残すよう勧めたが、復興を信じる気力は残っていないようだった。

電気製品までそろった住宅に、姉は「ありがたい」と喜んだ。しかし一年ほど様子が変わった。「震災のことを話せる人がいない」。部屋に閉じ

痕跡

こもりがちになり、知りがついていた被災地の状況にも、無関心になった。親類が部屋を訪ねたとき、首にコートを巻き、冷たくなっていた。印刷会社で定年まで勤め上げ、自分の墓まで用意していたしっかり者の姉。信じられない最期だった。

災害と自殺。その関連を調べた研究は、世界的にも少ない。

神戸大学医学部の主田英之助手(法医学)によると、震災が起きた一九九五年、西区、北区を除く神戸市内の自

生と死の境

8

人知れず自ら絶った命

透き通った水面に白い花を咲かせるハイカー

殺率は、大幅に減少した。人口十万人あたりの自殺者は一六一人で、前年から四人以上も減った。九一年からの増加傾向が一変した。

震災前後の十年で、全国の値より低かったのは、この年だけだ。

主田助手は「あくまで推論だが、被災地の連帯感や支え合いが作用したかもしれない。日々の生活に必死だったから、とも考えられる」。

一方でその年、月別の自殺率は九月から急増。九八年には、人口十万人あたり三五・一人に達した。不況の影響で全国的に増えたとはいえ、全国の値より約十人も多かった。

医療現場の感覚も、数字と重なる。「生活再建の格差が広がるにつれ、う

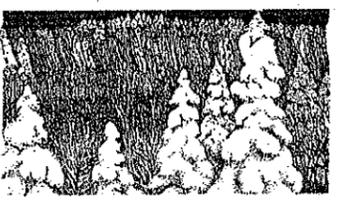
つ患者が増えた。自殺の増加も、不思議ではない」。神戸市長田区で精神科を開業する宮崎隆吉医師はいう。

震災や事件後のPTSD(心的外傷後ストレス障害)などを研究、治療する「兵庫県こころのケアセンター」が四月、神戸市中央区にオープンした。

震災で注目された「心のケア」。必要性的認識は広まったが、具体的な治療法などは確立していない。同センターの加藤寛研究部長(精神科医)は「自殺は、孤独死などと違い、議論されることさえなかった」と話す。

阪神淡路では神戸や西宮など五市が自殺者十七人を「災害死者」と認定

震災10年 守れいのちを 第1部



5月23日まで

木山魁

きょうの紙面

29面 ヘルパー資格80人無

28面 投票案内120万人分

2面 首相「内閣改造9月も

行政では関連死を「認定死」とも呼ぶ。神戸市の申慰金給付審査委員会には、千二百三十六人の申請があり、認定されたのは約半数だった。

震災当日、入院先の病院が停電し、人工呼吸器が停止して亡くなった同市東灘区の住み込みハイカー当時七〇歳は、認定されなかった。

審査では「もともと衰弱し、地震がなくても同様の結果をたどっていた人には厳しかった。住井さんは死の前日から既に危篤状態だった。だが、停電しなければどうだったか...」

別の市の審査委員だった医師は「被災地の皆が地震の影響を受けた以上、

記憶

皆の死が地震と無関係ではない。申慰金が支払われる以上、どこかで線を引き必要があった」と振り返る。

神戸市の男性「当時七〇歳も、震災による停電で人工呼吸器が停止し、亡くなった。市は関連死と認めなかった。しかし、四年がかりの裁判の末、最高裁が震災との関連を認めた。消防庁が公表している六千四百三十三人の死者となった。

神戸市須磨区の平川健さん「当時七〇歳は、住み込みで働いていたシソ工場が被災した。近くの高校の体育

生と死の境

10

「線」に隔てられた最期

館に避難した。三日後、見舞いに訪れたいとこ、小野昇次郎さん(六六)同市北区は平川さんのせきを気にした。

一週間後の夕方、小野さんの悪い予感的中した。急報を受け、病院に走ると、既に息のない平川さんが救急車で運ばれたと知らされた。

死因は気管炎。同僚の家で風邪を借り、一人で寝て、そのまま起きてこなかったという。医師の所見には「避難所で風邪をこじらせた」とあった。

同様のケースで関連死と認められた例はあった。平川さんの場合、申請はなく、震災死者に含まれていない。その事実を小野さんが知ったのは五年後だった。「何とかならんのか」。区役所に訴えたがどうにもならなかった。

平川さんには親も妻も子もなかった。

同社が進める阪急西宮日本最大級のショッピングセンターを目指す。田本店(大阪市)並みの高級品もそろえた大阪以西の基幹店にすることを、神戸、宝塚、川西に

た。災害申慰金の受給資格者がいなかった。だが、尼崎市などのほか、神戸市でも、受給資格者のいない計七人の関連死が認められている。

「なぜ」。今となっては、明確な答えは出てこない。

神戸新聞社の調査では、「肺炎」「心不全」「心筋梗塞」が関連死の死因の約半数を占めた。

「実際には、心筋梗塞や脳卒中はもっと多かった」。津名都医師会の大橋高明名誉会長が言う。

震災から四月末までの郡内全域の病死者を同会が調べた。心筋梗塞は前年同期の六人から二十八人に、脳卒中は三十一人から五十八人に増えていた。

「治療の中断による持病の悪化や、心身のストレスなどが原因。震災と関連があるといわざるを得ない」

だが、自治体が公表する郡内の関連死は四人だ。

震災死には、引かれた「線」があった。その外にこぼれた死は、知る人の記憶の中にしかない。

「おわり」

震災死に関する意見や、連載への感想などを寄せください。

〒650-8071 神戸新聞社 震災10年取材班(社会部) フォックスは078-3600-55001。

ホームページ(www.kobe-np.co.jp)からも投稿できます。

(一)連載は社会部・磯辺廣子、森本尚樹、浅野広明が担当しました

震災10年 守れいのちを 第1部



5月23日まで

木山魁

きょうの紙面か

28面 井上大臣就任祝う会中止

29面 道警裏金問題で返還勧告

2面 6カ国協議作業部会、来月12日

3、22、24面 春の叙勲に4019人

2007 1/15

見出し：08年の神戸市 独居死最悪518人 高齢化影響 10年で1.8倍に

08年の神戸市 独居死最悪518人 高齢化影響 10年で1.8倍に

自宅で誰にもみとられずに亡くなった一人暮らしの人が、北、西区を除く神戸市の七区で昨年一年間、五百十八人と過去最多だったことが、兵庫県監察医務室の調査で分かった。二十年前の二・九倍、十年前と比べても一・八倍に上り、阪神・淡路大震災後、仮設住宅などで顕在化した「独居死」問題が、高齢化の進行により深刻化していることを浮き彫りにした。(24面に関連記事)

県監察医務室によると、これまで最も多かった二〇〇七年の四百八十人から、三十八人増えた。五百十八人の内訳は男性三百七十七人、女性二百一人。年齢別では七十歳以上が三百十一人と六割を占めた。死後八日以上たって発見されたのは百九人。うち、四十五人が死後二週間から一カ月以内で、十二人は一カ月以上経過していた。

死因は病死が三百七十二人と七割を占める一方、自殺も四十二人を数えた。病死のうち、発症から丸一日以上たって死亡したとみられるケースは、肺炎や消化管出血などの四十三人で、「発見が早ければ救命できた可能性が高い」(県監察医務室)という。

〇五年の国勢調査によると、独居高齢者は同市内で七万百十人と、一九九五年の三万五千五百二人からほぼ倍増していた。市は本年度も、安否確認のための訪問や支援拠点の設置など見守り事業を全市で展開しているが、高齢化や独居世帯増加のスピードに追いついていないのが現状だ。(石崎勝伸)

▼復興住宅では46人 9年で計568人

阪神・淡路大震災の災害復興住宅での独居死が、昨年一年間で四十六人に上ることが分かった。過去九年で最も少ないが、死後十一日以上たって見つかった人が四人おり、うち一人は約五カ月が経過していた。

これで仮設住宅がなくなった二〇〇〇年一月以降、計五百六十八人となった。

兵庫県警の検視結果を参考に神戸新聞社がまとめた。四十六人(前年比十四人減)の内訳は男性二十七人、女性十九人で平均年齢は七二・九歳。年代別では八十代が最多の十九人で以下、七十代=十一人▽六十代=六人▽五十代=同一と続いた。六十五歳以上は三十五人と76%を占めた。

発見までの期間は二十四時間以内が二十八人、二十日は十三人。神戸市兵庫区で亡くなった七十二歳の男性は死後約五カ月が経過していた。

死因は病死がほぼ八割の三十六人。事故死八人、自殺一人だった。

発見者は隣人・知人=十三人▽家族=十人▽市職員ら=九人など。ほかにホームヘルパーや、水道などを長時間使わない場合に作動する警報で見つかったケースもあった。

2009年1月15日付 神戸新聞

2000 1/14

見出し：◎<震災5年 あしたへ>今後求められる心のケア/復興住宅でも対応を/独居死233人 自殺20人/兵庫県警まとめ(写真付き)

十四日に全面解消された仮設住宅のうち、兵庫県内で、だれにもみとられずに「独居死」した入居者が二百三十三人に上ることが、兵庫県警の同日までのまとめで分かった。死後一週間以上たって発見されるケースに加え、自殺者も二十人を数えるなど、生活環境の激変や暮らし再建への被災者の苦悩を物語っている。同様の傾向は災害復興公営住宅でも続いており、高齢者対策や心のケアなどの対応が求められている。

県警によると、独居死は、一九九五年三月九日、尼崎市内で六十三歳の男性が病死から二日後に発見されたのが最初で、同年は四十六人。死後約十一カ月経過してから見つかった男性もいた九六年は七十二人と増加。翌九七年には入居者がピーク時より三割以上減ったが、前年並みの七十人を数えた。その後は復興住宅への転居などが進み、九八年は三十九人、昨年は六人と減少した。

その一方で、長引く仮設住宅での生活が負担となったり、失業や病苦などが動機とみられる自殺者は年々増加し、九八年には七人が自ら命を絶った。年末に仮設住宅がほぼ解消された昨年も、復興住宅への入居を目前に控えた五十七歳の男性が自殺。就職問題で悩んでいたといい、被災者を取り巻く状況が依然として厳しい実態を示した。

性別では男性が百六十一人、女性七十二人。年齢別では六十代が七十七人と最も多く、五十代=五十人、七十代=四十六人と続いている。いわゆる壮年層の四十~六十代が百五十二人と全体の六五%を占めたが、三十代も九人を数えた。

県警は「把握が難しい」として、災害復興公営住宅での独居死者数をカウントしていないが、さらなる高齢化など、仮設住宅と同様の問題が起きており、一人暮らしの高齢者を中心に巡回連絡を強化したり、「ふれあい交番」を開設するなどの活動を継続していく。

2000年1月14日付 神戸新聞